

難波西鶴と

海の道

【2】

森田 雅也

今日の私たちは、日本の地図といつとほとんどの人が描くことができるでしょう。西鶴のころの17世紀の日本人もすでに今日の地図に近い日本の形を認識していたようです。

しかし、船を利用する人たちには違った地図がありました。海路図もそうですが、それよりもっとわがままな地図、具体的には、自分の最寄り港を中心として日本中に広がる「海の道」です。

例えば、17世紀の大坂の人は、船で江戸へ向かえば14日前後、北海道松前に向かえば、

風が良ければ十数日、博多まで4日前後などというように所要日数、時間による遠近地図を描きました。大坂から江戸まで陸路でも約14日。大坂人にとって、松前は江戸と同じくらい、それより近いという感覚です。今の東京や北海道に対する距離感とかなり違いますね。松前の人たちも大坂は近く、江戸は遠いという感覚だったでしょう。新幹線が青森までつながり、ぐんと東京が近くなった今とは違います。

江戸時代の北海道には松前が一番しかありませんでした。でも、大藩ではなく、1万石

でした。当時の北海道では米

『諸国ばなし』の情報源に

が取れません。ですから、藩主は1万石の最低の大名として扱われたのです。代わりに諫・昆布・鮭などで交易しました。

結構裕福な藩でしたが、元来蝦夷地はアイヌの国。藩の公益利益独占をめくって、西鶴が俳諧で頭角を現し始めたころの寛文9(1669)年、大規模なシャクシャインの戦いが起こっています。

その松前からの航路は、近い東回り航路より安全な西回り航路が用いられました。目の前の難所津軽海峡を越え、漂流の危険性がある三陸、水戸沖などを回って江戸へと入る航路より、日数はかかって目に見えぬ佐渡島あるいは酒田を目指し、福井、兵庫、島根、下関を回り、瀬戸内海航路を通り、大坂へと向かう比較的 안전한航路を多用したのです。

これは成功しました。昆布

の場合、江戸へ行かなくても天下の台所大坂で売れば高価で取引されます。もうけたお金で船一杯のお米を買って松前に戻るわけです。大坂で松前・昆布というブランドが多いのはこのためです。

ところで琉球産の砂糖を薩摩藩は大坂で売り、買ひ物をしていきます。昆布は自藩にありませんから、大坂で買ひ、それは琉球にまで広がりました。沖縄料理にクープ(コンブ)を利用した料理が盛んなのもそのためです。

この海の道を情報源として利用した西鶴作品には松前を舞台とした話が多くあります。『西鶴諸国ばなし』の序には「松前に百問」の昆布があるとしますが、200ほど近い昆布ではラッコも体に巻くのに苦労しますね。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

食文化を運んだ航路